

発達障害児者を抱える養育者の心理的体験に関する研究の動向

上岸 光太¹・上手 由香¹

Review for research on psychological experiences of parents of children with developmental disabilities.

Kota Jogan and Yuka Kamite

In recent years, social interest in developmental disorders has increased, and the need for support for people with developmental disabilities and their families from an early stage has been pointed out. This paper specifically reviews previous research on the psychological experiences of caregivers of children with developmental disabilities. It has been pointed out that caregivers of children with developmental disabilities experience high levels of childcare stress. This has negative effects on their mental health, such as anxiety and depression. Furthermore, it is known that the effects on caregivers are wide-ranging, including family relationships and time and financial burdens. Caregivers who are affected in this way experience many emotional conflicts such as anger and self-blame in their daily lives. Attitudes toward children change with social support and deepening knowledge about disabilities, but the psychological effects change depending on the development of the child and last for a long time. In addition, experiences such as marital crises and peer pressure can put caregivers at risk of becoming socially isolated. In the future, we will focus on psychological support that take into account the fact that caregivers of children with developmental disabilities have complex psychological experiences not only in their relationships with their children, but also in their relationships with those around them while providing daily care.

キーワード : developmental disabilities, parents and families, psychological experiences, acceptance process

はじめに

発達障害とは、発達障害者支援法 (2004) において「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎

¹ 広島大学大学院人間社会科学研究所

性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するものと政令で定めるもの」と定義されている。文部科学省の調査によると、通常学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒は、小中学校で 8.8%、高等学校で 2.2%であったと報告されており（文部科学省，2022），身近な障害であることが指摘されている（日本発達障害ネットワーク JDDnet 事業委員会，2019）。近年では，発達障害に関する社会的関心の高まりにより，母子保健事業において，保護者支援を念頭に置いた早期発見の必要性が指摘されるなど，当事者の療育と保護者支援の両立が求められている（厚生労働省，2022）。

発達障害の持つ特徴として，一見しただけでは障害とわかりにくく，周囲の理解を得難いことが指摘されており（澤田，2011），社会に参加する場面での周囲との不一致や心理的問題は当事者だけでなく，家族にも生じやすいことが考えられる。さらに田中（2005）は，発達障害児者の養育者が，当事者の発達段階に応じて繰り返し悲しみや不安などの情緒的混乱を繰り返すことを指摘している。そのため，発達障害児者の養育者が受ける心理的影響を，養育者や当事者の発達段階を踏まえながら理解し，心理的問題が生じた際の相談支援について専門家支援の拡充が必要であると考えられる。

そこで本稿では，これまでに国内外で行われた発達障害児者の養育者が受ける心理的影響に関する心理学研究を概観することで，発達障害児者を抱える養育者の心理支援に対するニーズを明らかにすることとする。

発達障害児者を育てることによる養育者への心理的影響

発達障害は 1970 年代に概念が整備されて以降，急激に研究が進んだ領域である。1980 年代になると養育者に関する研究が行われ始め，近年ではペアレント・トレーニング等の介入効果研究のメタ分析から養育者の対応によって当事者の青年期以降の適応を予測するとのモデルが示されている（Claussen et al., 2022 など）。国内での発達障害児を持つ親に関する研究動向をまとめた通山（2011）は，子どもの療育における親支援や訓練に関する研究が最も主要なトピックであることを述べており，発達障害児を抱える養育者に関する研究は主に養育者が発達障害児に与える影響を主眼に置いた研究が中心であった。また，養育者が「共同治療者」として位置付けられ始めたことにより，同時並行的に養育者のストレスや養育者の障害受容に関する研究も徐々に注目されるようになっていった（大西，2007）。以下では，養育者のストレスを始めとしたメンタルヘルスへの影響について国内外での知見を概観した上で，特に日本国内での発展が目立つ障害受容について述べる。また，子どもの抱える障害の種別によっても養育者の体験は異なるため，特に注意欠陥多動性障害（以下，ADHD）と自閉スペクトラム障害（以下，ASD）についてそれぞれの知見を概観することとする。

発達障害児の養育者のメンタルヘルスへの影響

ADHD を抱える子を育てる親はうつ病のリスク（Faraone et al., 1995）や，アルコール摂取量（Pelham & Long, 1999）が増加することが報告されている。Anastopoulos et al. (1992) は，ADHD を抱

える子を持つ母親は、特に子どもの反抗的行動によって子育てへのストレスを感じていることを指摘している。ADHDを抱える子どもは思春期や青年期を迎えるとさらに学業上の問題や性的な問題行動、犯罪行動等のリスクが高くなることが知られており (Meltzer et al., 2003), 養育者はさらなる問題にさらされることとなる。Edwards et al. (2001) は、ADHDを抱える青年とその家族がそうでない家族に比べ、家庭内での対立を多く経験すると報告している。また、アメリカでの縦断研究では、ADHD児の9年間の医療費の中央値が4306ドルだったのに対し、非ADHD児の場合は1944ドルだったと報告されているように、多動不注意傾向におけるケガやADHDの治療、療育施設の利用などによる家庭への経済的負担も指摘されている (Leibson et al., 2001)。このように、注意や行動上の障害特性が大きいADHD児の養育者においては、子どもの発達段階が上がるに応じて、問題行動の影響がより広範かつ重大となることで養育者にとってもうつ病や家族の不仲、経済的負担など生活全般に影響が及ぶことが指摘されている。

一方、ASD児を育てる養育者の子育てにおけるストレスが健常児に比べ高いことは1980年代から知られており、子どもの過敏さや気分不安定さ、言語や学習の障害、食事・排泄などの生活習慣など多岐に渡る要因がストレスの要因となることが知られている (Karst & Van Hecke, 2012)。また、言語発達の問題や限定的な興味や行動の反復などの中核的症狀よりも、癩癩などの情緒的・行動的問題への対処がストレスや不安、抑うつの原因となることが指摘されている (Davis & Carter, 2008, Sharpley et al., 1997)。また、Davis & Carter (2008) は、ASD児の親が健常児の親に比べ有意にうつ病のリスクを抱えていることも報告している。Seltzer et al. (2001) の調査では、ASDの子どもを持つ50歳以上の親の50%が子どもと同居していると回答している (定型発達の場合は17%)。また、ASDを抱える子どもはその行動の特徴から発達の早期から養育者に発達上の懸念を抱かせることが報告されており (Bolton et al., 2012), 養育者に対するケア役割の要請が長期に渡り、養育者自身や子どもの将来に対するポジティブな予測を持ちにくくさせることが指摘されている (Karst & Van Hecke, 2012)。その結果、Ekas et al. (2010) では、ASD症状が母親の主観的幸福度に負の影響を及ぼすことが示されている。また、同じく不安 (Lai et al., 2015) や抑うつ (Cohrs & Leslie, 2017) が高まることも指摘されている。これらの養育者のメンタルヘルスへの影響はASD児の障害の程度 (Rivard et al., 2014) や、社会的サポートの有無 (Boyd, 2002) によって強くなることも明らかになっている。また、ASD児の親は定型発達児の親に比べ、身体的健康度が低いことも指摘されている (Allik et al., 2006)。

以上のようにASD児を抱える養育者は、幼少期から子どもの特徴的な行動様式に不安を抱え、子どもの年齢が上がるにつれて情緒的・行動的障害によって育児ストレスや抑うつなどのメンタルヘルスへの影響を受けていることが明らかになっている。さらに、社会的障害を特徴とするASDでは当事者の青年期以降も社会的自立をできず生涯に渡って養育者が養育を行う必要に迫られるリスクが高く、幸福感や身体的影響など人生の広範囲に渡る影響を受けていることが指摘されている。また、このような養育者のメンタルヘルスへの影響が子どもの問題行動を増加させ、家族全体の適応をさらに悪化させるという悪循環も指摘されている (Baker et al., 2003)。ASD児は刺激への過敏さや独特な行動特徴などの特性を持つために、養育者はできるだけ外出を避けるという対処方略を

取ることも指摘されており (Sivberg, 2002), 子育てのストレスを抱えながら社会的支援につながらず家庭で一人苦しむ養育者の姿もある。

国内でも ASD 児の母親は他の障害を持つ子どもの母親に比べ育児ストレスが高いことが明らかになっている (坂口・別府, 2007)。また, 山根 (2013) は, 発達障害を持つ親のストレスとして, 「理解・対応の困難」, 「将来・自立への不安」, 「周囲の理解のなさ」, 「障害認識の葛藤」を挙げ, 特に「周囲の理解のなさ」, 「障害認識の葛藤」が発達障害に特徴的であることを指摘している。

以上から, 発達障害児を抱える養育者は, 主に子どもの癇癪や反社会的な言動などの問題行動によって高い育児ストレスを抱えていると考えられる。また, 子どもの年齢が上がるにつれ, 問題行動の影響の大きさや社会的自立などの課題が生じ, 長期に渡って親としての困難を抱えていることが推察される。その結果, 不安や抑うつ, 主観的幸福感など多くのメンタルヘルスへの悪影響を受けていることがこれまでに多くの数量的調査によって明らかにされている。

発達障害児を育てる養育者の障害に対する認識の変化

佐藤 (2005) は, 発達障害という概念が 1980 年代以降に注目されたことで中枢神経系の障害であるとの認識が広がり, 母親の養育や本人の怠けが原因ではないとの認識が広がったことを指摘している。このような認識の広がりによって, 養育者 (主に母親) は, 発達障害児の共同治療者として位置付けられるようになった。それと同時に発達障害児の養育および治療を行う親の障害認識や障害受容など発達障害児を抱える親の心理的過程について注目がなされていった。このような心理的過程については主に面接調査など養育者自身の語りをデータとして用いた研究が行われている。

障害児を持つ養育者の障害受容については, Drotar et al. (1975) の提唱した「段階説」を始めとして, Wikler (1981) の「慢性悲嘆説」, さらには中田 (1995) の「螺旋モデル」と発展していった。さらに国内ではその後, 障害に対する価値の転換など子の「障害の受容」と, 障害をもった子どもを自分の子どもとして統合的に受け入れる障害のある「わが子の受容」の 2 つの側面があることが指摘されている (桑田・神尾, 2004)。このように, 親の障害受容は発達障害児の親に関する研究の主要な一分野として発展して行った (大西, 2007; 通山, 2011)。

脳性麻痺やダウン症児の親の障害受容については, 出生時から我が子の異変を感じ取り, 出生直後に診断を受けた際には「ショック」や「否認」が生じる喪失体験としてのプロセスが指摘されている。しかし, ASD 児の親の場合には, 発達の早期において子どもの行動に「不安」を抱く段階があり, 養育者自身も障害を認識するまでに時間がかかり, 受診までに時間を要することが指摘されている (Young et al., 2003)。さらに, 診断後にはむしろ安堵感を抱くことが指摘されている (Midence & O'neill, 1999) など, 他の障害とは障害受容過程にも異なる点があることが知られている。夏堀 (2001) は, ASD 児の母親の障害受容過程について, 「母親の育て方の問題である」との自責や周囲からの指摘があること, 外見上に障害が表れないことや発達が不均衡であることなどの ASD の特徴から, 診断への反感や子どもの障害認識の阻害など, 障害受容を阻害する要因が生じることを指摘している。さらに, ASD 児の母親の場合, 診断を受ける以前に子どもの行動に対して障害の疑いを持っている段階が最もつらい時期として経験されていることも明らかにしている。

同様に一瀬 (2021) は、乳幼児健診等で発達の問題を指摘された後で、専門療育機関での説明を受けるまでの期間に養育者は不安やショックを抱き続けており、この時期に対する支援が必要であると指摘している。

ASD 児の母親の障害受容では、特に子どもが診断や専門的な支援を受けるまでのプロセスの中で心理的な葛藤が生じやすいことが明らかになってきた。また、上川 (2020) は、発達障害児者の親の障害受容に関する研究のレビューから、障害を認識することが子どもの行動の受容に繋がり、子どもの行動を受容することでさらに障害の認識が進むといった連続したプロセスであることを示唆している。これらの障害受容研究は、発達障害の当事者だけでなく、養育者や家族もまた支援を必要としている実情を示してきた。一方で夏堀 (2003) は、親の障害受容に関する研究が「望ましい親役割」を示し、良い親とそうでない親をカテゴリー化しているとして批判しているなど、「障害受容」概念がむしろ「障害を受容しなければならない」と親に強制するような形で当事者たちを非難するように用いられているとの議論もある (上田, 2020)。そのため、近年では「障害受容」との語に限らず、発達障害児を育てる養育者の心理的過程を扱った研究が見られる。

田辺・田村 (2006) は、ASD 児の親への質問紙調査から、障害の告知後にショックや不安、自責の念が生じること、その後療育施設への通所を通して安心感や障害理解が進むことを明らかにした。同時に家族の理解が得られないことや、子どもの将来に悲観になってしまうなどの葛藤を抱えていることも明らかになった。また、下田 (2006) は、知的な遅れを伴わない ASD 児の場合、養育者にとっても障害の認識が困難であり、「子どもが障害であるのかないのか取捨がつきにくい」との混乱した思いを抱えていることを示唆している。Rodrigue et al. (1990) は、ASD 児と健常児の母親の比較調査から、発達障害児の母親は子どもの行動に対する認知的対処方略として、自分の養育が悪いとの自責を用いやすいことを指摘している。このように、特に ASD 児の親の場合には、「障害の受容」に至るのではなく、子の障害について認識と混乱とを繰り返し、その結果自責感や罪悪感といった思いを繰り返し体験することが示唆されている (山根, 2009)。松岡他 (2013) は、ASD 児の母親が体験する困難さについて、半構造化面接から「家事、療育、教育支援のために余裕のない日常」や「長期に渡って続く心理的揺れと子どもの将来への心配」などを挙げている。以上のように ASD 児の養育者は障害の認識を含めた心理的な揺らぎを体験しながら、日々の養育を行っていることが指摘されている。

Leitch et al. (2019) は、ADHD 児を抱える養育者に対し自由記述および面接調査を行った。その結果、ADHD 児の親の場合には感情制御の難しさや、指示を聞くことの難しさなどの子どもの行動に強い怒りやストレスを抱えながら同時に、自己嫌悪に陥る子どもの様子に対して悲しみを抱いている様子が報告された。また、眞野他 (2009) は、学童期の ADHD 児を抱える母親への半構造化面接から、母親たちが子どもの幼少期から ADHD 特徴による育てづらさから「可愛くない」などのネガティブな情動体験をしていることを明らかにした。Corcoran et al. (2017) は、ADHD 児の親に関する質的研究のメタ分析を行った。その結果、ADHD 児の親は集中力の欠如を始めとした子どもの問題行動があり、監護の必要性が一日中続くことに多くの否定的な感情や極度の緊張状態を体験していた。しかし、このような緊張状態での監護の努力は報われず、子育てに対する無力感を抱

いていることが指摘されている。Ringer et al. (2020) では、ADHD 児の行動に対して、養育者は理解できなさから怒りや心理的苦痛を感じ、子どもの行動を説明するために自分の養育が悪いとの自責的な認知方略をとることが述べられている。このように、ADHD 児の場合は、子どもの衝動的で危険な行動に対して怒りを喚起されることが多くの養育者から語られている。これに対して高堰 (2022) は、発達障害児の親への半構造化面接から、子どもの行動の背景を分析しようとする視点や日頃の子どものとの交流を見つめなおす視点が認知的な怒りを制御する方略として働くことを指摘した。さらに、Lin et al. (2009) では、ADHD 児の親が書籍などを通して ADHD に関する知識を身につけようと努力することで子どもの行動に対する認知や子どもの障害を受け入れるように変容していくことが報告されている。

また、山根 (2012) は、発達障害児の親が我が子の障害に意味を見出していることが親の精神的健康を支えることを指摘している。湯浅他 (2023) は重度知的障害を伴う ASD 児の母親への面接調査から障害に対して親が意味付けを行う過程について述べている。その結果、当初は障害について「我が子が特別問題なわけではない」との過小評価が生じるが、診断や専門家からの「治らない」との指摘を受け、緊張状態にあることを指摘している。その後「同じ境遇にある母子たちとの交流」によって、緊張状態からの調節が生じ、意味付けが行われるとした。このように、発達障害児を抱える親において、親の会への参加など同じ境遇の他者との交流が障害受容を促進するとの知見は多い(松井他, 2016 など)。

このように、発達障害児者の養育者の障害認識については、主に養育を行う中での心理過程について質的な検討が行われてきた。これらの知見は、養育者が自責感や怒り、障害認識の混乱など様々な葛藤を抱えていることを明らかにした。上でも述べたように、養育者に関する研究の主流は親の行動を改善する介入に関する研究であったが、このような葛藤を養育者が抱えているとの知見は養育者が自らの行動を改善することの困難さを指摘している (Corcoran et al., 2017)。

発達障害児者を育てる養育者と周囲の関係

Bristol et al. (1988) は、ASD 児の養育を行う母親の抑うつが父親のサポートによって低減されることを明らかにしているように、主として養育を行う養育者だけでなく、夫婦間や周囲からのソーシャルサポートは発達障害児の育児の負担を低減させることが知られている (他に内野, 2006 など)。そのため、以下では発達障害児を抱えることによる影響の夫婦間での性差や、夫婦関係への影響、他の親族など家庭内外の他者と主たる養育者との関係について述べる。

発達障害児を育てる親のメンタルヘルスへの影響は性差が指摘されており、父親に比べ母親は育児ストレス (Davis & Carter, 2008) やうつ病のリスク (Olsson & Hwang, 2001) が高いことが指摘されている。また、夏堀 (2001) の研究では、母親が子どもの状態を周囲 (特に父親) にうまく伝えられないという悩みを持っていることが明らかになっているなど、発達障害児を抱えることは夫婦間での負担感や障害認識の違いを生じさせやすい可能性がある。

発達障害児を育てることによる夫婦間での葛藤も指摘されており、Hock et al. (2012) は、ASD 児を持つことが夫婦関係に与える影響を検討するため、37 歳～60 歳の 10 組の夫婦に面接調査を行っ

た。その結果、ASD 児を抱えることは、家事の分担や兄弟姉妹の世話など両親間での調整の必要を増加させることが明らかになった。しかし、同時に ASD 児の養育の多忙さから身体的・感情的な疲労感や経済的負担をもたらし、両親間でのコミュニケーションを困難にすることが語られた。さらに、周囲とは異なる子育てでの困り感による孤独感や、外出・余暇活動の制限などの影響も語られており、結果的に夫婦がお互いに対して養育の負担を感情的に要求しあう悪循環が明らかになった。Johnston & Mash (2001) は、ADHD を抱える子を育てることで、特に幼少期には常に子どもを見張っていなければならないという状況に陥り、家族関係や夫婦関係が悪化し、結果的にさらなる社会的・経済的問題に陥ることを指摘している。また、Rodrigue et al. (1990) では、ASD 児の母親の夫婦関係への満足度が健常児に比べて低いことが明らかになっている。その結果、ASD 児を抱える夫婦は、定型発達児を抱える夫婦に比べて離婚率が約 2 倍高いことも指摘されている (Hartley et al., 2010)。また、多くの家庭では一方の親(ほとんどが母親)が、子どもの養育を主に担当することとなり、もう一方の親は子どもに対する適切な対処方法を知らないために夫婦間での対立が生じたり、一方の親が子育てから離脱してしまったりする様子が報告されている (Lin et al., 2009)。

一方で、発達障害児の子育てを通して夫婦関係の質が向上するとの知見も見られる。Heiman (2002) は、ASD や LD などを抱える障害児の親のレジリエンスについて検討するため面接調査を行った。その結果、参加者の 60%以上が障害児の子育てを通して夫婦関係が強固になったと回答した。また、上述の Hock et al. (2012) でも、ASD 児の養育の初期に生じる夫婦関係の危機の中で、子育てを行う「タッグチーム」として夫婦関係が質的に変化することが指摘されている。このように、発達障害児の養育を行う夫婦は必ずしもネガティブな影響が継続するわけではなく、子どもの養育を行う協力体制が築かれることで夫婦関係が良好になることが明らかになっている。

夫婦関係の他にも、発達障害児を抱える養育者は他者と関わることとなる。Heiman (2002) では、障害児を育てる親の一部が祖父母や自身の兄弟姉妹などの親族からショックや悲しみを表明される否定的な反応を受けていることが明らかになっている。また、Leitch et al. (2019) では、ADHD 児を抱える親が、家庭外の他者から服薬への偏見や養育に対する批判を受けている様子が報告されている。Ringer et al. (2020) では、ADHD 児の親が他児との衝突の際に他児の親から「子どもをきちんと養育して欲しい」との思いを感じ取り、恥ずかしさを感じていると指摘している。一方で Lin et al. (2009) では、親戚や友人、専門家からの助言や養育を手伝うなどの助けが養育者にとってストレスや養育を行う上での心理的問題への対処に役立っていることを指摘している。

以上のように、発達障害児者を主に養育する養育者は、特に子どもの幼少期には夫婦間での葛藤や周囲からの無理解を体験し、孤独感を抱きながら養育を行っていることが指摘されている。しかし、養育を続けることで夫婦関係の質的な変化や周囲からのサポートの経験も増え、さらなるソーシャルサポートを受けることや養育行動を改善していくことが可能になることが明らかになっている。

まとめ：発達障害児と暮らす養育者の心理状態

本稿では、発達障害児者の養育者が受ける心理的影響について国内外の知見を概観した。これまで、主に数量的調査によって育児ストレスや抑うつ、不安などのメンタルヘルスへの影響が検討されてきた。その結果、発達障害児者を養育することは養育者のメンタルヘルスにネガティブな影響を与えていることが明らかになっている。さらに、経済状況や家族関係など生活の広範囲に影響が及ぶことも明らかになっている。また、発達障害当事者の発達段階に応じて問題行動や社会的な困難さは変容していき、養育者が受ける影響は生涯に渡ることが指摘されている。

また、養育者の障害受容や障害への認識については主にインタビュー調査を用いた質的な検討が行われてきた。これまでに発達障害児の場合には出生直後ではなく、子育ての中で徐々に子どもの行動や発達に対する不安が生じ始める点で、ダウン症や脳性麻痺、重度心身障害などの他の障害とは異なる過程を辿ることが明らかになっている。さらに、一見しただけでは障害とわかりにくいという特徴によって、周囲からの理解を得ることができない体験や、養育者自身も子どもの障害に対する認識が揺らぎながら養育を行っていることが指摘されている。また、子どもの行動に対する怒りや自身の養育に対する罪悪感を日常生活の中で繰り返し抱いていることも語られており、様々な思いが揺れ動きながら養育を行っていることが示唆されている。

このような心理状態にある養育者に対しては家庭内外のソーシャルサポートの必要性が指摘されている。しかし、発達障害児者を育てることは夫婦間での衝突を引き起こすことがこれまでに指摘されている。さらに当事者の持つ特性によって、家庭外のコミュニティへの参加が阻害されることや、周囲からの批判的な声にさらされる経験も語られており、社会的に孤立するリスクが高いと考えられる。

ここまで述べた発達障害児者の養育者の体験については、文化的・社会的影響を大きく受けることが予想される。そのため、発達障害に対する社会的関心が高まり、公的支援も拡充されている現在の我が国において、再度養育者の心理的体験について検討を行っていく事は、今後さらなる家族支援を拡充する上で重要である。また、養育者の心理的状态は養育者が行動を改善する上での障害要因となり、発達障害当事者の適応を予測することが指摘されているため、発達障害児者の養育を行うことが養育者自身のライフサイクル全体に与える影響や、繰り返し体験される複雑な情緒的葛藤を明らかにすることが重要であると考えられる。また、特に国内では日々の子育てで中心的な役割を担っているのは母親であるとの指摘があり(柳澤, 2012)、父親が発達障害児者の養育に参加することについてもさらなる検討が必要である。

引用文献

- Allik, H., Larsson, J., & Smedje, H. (2006). Health-related quality of life in parents of school-age children with asperger syndrome or high-functioning autism. *Health and Quality of Life Outcomes*, 4(1), 1-8. <https://doi.org/10.1186/1477-7525-4-1>
- Anastopoulos, A. D., Guevremont, D. C., Shelton, T. L., & DuPaul, G. J. (1992). Parenting stress among

- families of children with attention deficit hyperactivity disorder. *Journal of abnormal child psychology*, 20, 503-520. <https://doi.org/10.1007/BF00916812>
- Baker, B. L., McIntyre, L. L., Blacher, J., Crnic, K., Edelbrock, C., & Low, C. (2003). Pre - school children with and without developmental delay: behaviour problems and parenting stress over time. *Journal of intellectual disability research*, 47(4 - 5), 217-230. <https://doi.org/10.1046/j.1365-2788.2003.00484.x>
- Bolton, P. F., Golding, J., Emond, A., & Steer, C. D. (2012). Autism spectrum disorder and autistic traits in the Avon Longitudinal Study of Parents and Children: precursors and early signs. *Journal of the American Academy of Child & Adolescent Psychiatry*, 51(3), 249-260. <https://doi.org/10.1016/j.jaac.2011.12.009>
- Boyd, B. A. (2002). Examining the relationship between stress and lack of social support in mothers of children with autism. *Focus on autism and other developmental disabilities*, 17(4), 208-215. <https://doi.org/10.1177/10883576020170040301>
- Bristol, M. M., Gallagher, J. J., & Schopler, E. (1988). Mothers and fathers of young developmentally disabled and nondisabled boys: Adaptation and spousal support. *Developmental psychology*, 24(3), 441. <https://doi.org/10.1037/0012-1649.24.3.441>
- Claussen, A. H., Holbrook, J. R., Hutchins, H. J., Robinson, L. R., Bloomfield, J., Meng, L., Bitsko, R. H., O' Masta, B., Cerles, A., Maher, B., Rush, M., & Kaminski, J. W. (2022). All in the family? A systematic review and meta-analysis of parenting and family environment as risk factors for attention-deficit/hyperactivity disorder (ADHD) in children. *Prevention Science*, 1-23. <https://doi.org/10.1007/s11121-022-01358-4>
- Cohrs, A. C., & Leslie, D. L. (2017). Depression in parents of children diagnosed with autism spectrum disorder: A claims-based analysis. *Journal of autism and developmental disorders*, 47, 1416-1422. <https://doi.org/10.1007/s10803-017-3063-y>
- Corcoran, J., Schildt, B., Hochbrueckner, R., & Abell, J. (2017). Parents of children with attention deficit/hyperactivity disorder: A meta-synthesis, part I. *Child and Adolescent Social Work Journal*, 34, 281-335. <https://doi.org/10.1007/s10560-016-0465-1>
- Davis, N. O., & Carter, A. S. (2008). Parenting stress in mothers and fathers of toddlers with autism spectrum disorders: Associations with child characteristics. *Journal of autism and developmental disorders*, 38, 1278-1291. <https://doi.org/10.1007/s10803-007-0512-z>
- Drotar, D., Baskiewicz, A., Irvin, N., Kennell, J., & Klaus, M. (1975). The adaptation of parents to the birth of an infant with a congenital malformation: a hypothetical model. *Pediatrics*, 56(5), 710-717. <https://doi.org/10.1542/peds.56.5.710>
- Edwards, G., Barkley, R. A., Laneri, M., Fletcher, K., & Metevia, L. (2001). Parent-adolescent conflict in teenagers with ADHD and ODD. *Journal of abnormal child psychology*, 29, 557-572. <https://doi.org/10.1023/A:1012285326937>
- Ekas, N. V., Lickenbrock, D. M., & Whitman, T. L. (2010). Optimism, social support, and well-being in

- mothers of children with autism spectrum disorder. *Journal of autism and developmental disorders*, 40, 1274-1284. <https://doi.org/10.1007/s10803-010-0986-y>
- Faraone, S. V., Biederman, J., Chen, W. J., Milberger, S., Warburton, R., & Tsuang, M. T. (1995). Genetic heterogeneity in attention-deficit hyperactivity disorder (ADHD): gender, psychiatric comorbidity, and maternal ADHD. *Journal of abnormal psychology*, 104(2), 334. <https://doi.org/10.1037/0021-843X.104.2.334>
- Hartley, S. L., Barker, E. T., Seltzer, M. M., Floyd, F., Greenberg, J., Orsmond, G., & Bolt, D. (2010). The relative risk and timing of divorce in families of children with an autism spectrum disorder. *Journal of Family Psychology*, 24(4), 449. <https://doi.org/10.1037/a0019847>
- Heiman, T. (2002). Parents of children with disabilities: Resilience, coping, and future expectations. *Journal of developmental and physical disabilities*, 14, 159-171. <https://doi.org/10.1023/A:1015219514621>
- Hock, R. M., Timm, T. M., & Ramisch, J. L. (2012). Parenting children with autism spectrum disorders: A crucible for couple relationships. *Child & Family Social Work*, 17(4), 406-415. <https://doi.org/10.1111/j.1365-2206.2011.00794.x>
- 一瀬 早百合 (2021). 早期発見から早期療育へのプロセス: 親の認識から「保護者支援」に着目して 和光大学現代人間学部紀要, 14, 61-80.
- Johnston, C., & Mash, E. J. (2001). Families of children with attention-deficit/hyperactivity disorder: Review and recommendations for future research. *Clinical child and family psychology review*, 4, 183-207. <https://doi.org/10.1023/A:1017592030434>
- Karst, J. S., & Van Hecke, A. V. (2012). Parent and family impact of autism spectrum disorders: A review and proposed model for intervention evaluation. *Clinical child and family psychology review*, 15, 247-277. <https://doi.org/10.1007/s10567-012-0119-6>
- 桑田 左絵・神尾 陽子 (2004). 発達障害児をもつ親の障害受容過程についての文献的研究 九州大学心理学研究, 5, 273-281. <https://doi.org/10.15017/3593>
- 厚生労働省 (2022). 発達障害者支援施策について 厚生労働省 Retrieved January 23, 2024 from <https://www.mhlw.go.jp/content/12600000/000888059.pdf>
- Lai, W. W., Goh, T. J., Oei, T. P., & Sung, M. (2015). Coping and well-being in parents of children with autism spectrum disorders (ASD). *Journal of autism and developmental disorders*, 45, 2582-2593. <https://doi.org/10.1007/s10803-015-2430-9>
- Leibson, C. L., Katusic, S. K., Barbaresi, W. J., Ransom, J., & O'Brien, P. C. (2001). Use and costs of medical care for children and adolescents with and without attention-deficit/hyperactivity disorder. *Jama*, 285(1), 60-66. <https://doi.org/10.1001/jama.285.1.60>
- Leitch, S., Sciberras, E., Post, B., Gerner, B., Rinehart, N., Nicholson, J. M., & Evans, S. (2019). Experience of stress in parents of children with ADHD: A qualitative study. *International journal of qualitative studies on health and well-being*, 14(1), 1690091. <https://doi.org/10.1080/17482631.2019.1690091>
- Lin, M. J., Huang, X. Y., & Hung, B. J. (2009). The experiences of primary caregivers raising school - aged

- children with attention - deficit hyperactivity disorder. *Journal of clinical nursing*, 18(12), 1693-1702. <https://doi.org/10.1111/j.1365-2702.2008.02604.x>
- 眞野 祥子・堀内 史枝・宇野 宏幸 (2009). 注意欠陥/多動性障害児の行動特徴と母親から子どもへの情動表出について 小児保健研究, 68(1), 28-38.
- 松井 藍子・大河内 彩子・田高 悦子・有本 梓・白谷 佳恵 (2016). 発達障害児をもつ親の会に属する母親が子育てにおける前向きな感情を獲得する過程 日本地域看護学会誌, 19(2), 75-81. https://doi.org/10.20746/jachn.19.2_75
- 松岡 純子・玉木 敦子・初田 真人・西池 絵衣子 (2013). 広汎性発達障害児をもつ母親が体験している困難と心理的支援 日本看護科学会誌, 33(2), 2_12-2_20. https://doi.org/10.5630/jans.33.2_12
- Meltzer, H., Gatward, R., Goodman, R., & Ford, T. (2003). Mental health of children and adolescents in Great Britain. *International review of Psychiatry*, 15(1-2), 185-187. <https://doi.org/10.1080/0954026021000046155>
- Midence, K., & O' neill, M. (1999). The experience of parents in the diagnosis of autism: A pilot study. *Autism*, 3(3), 273-285. <https://doi.org/10.1177/1362361399003003005>
- 文部科学省 (2022). 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果 (令和 4 年) について 文部科学省 Retrieved January 23, 2024 from https://www.mext.go.jp/content/20230524-mext-tokubetu01-000026255_01.pdf
- 中田 洋二郎 (1995). 親の障害認識と受容に関する考察-受容の段階説と慢性的悲哀 早稲田心理学年報, 27, 83-92.
- 夏堀 撰 (2001). 就学前期における自閉症児の母親の障害受容過程 特殊教育学研究, 39(3), 11-22. https://doi.org/10.6033/tokkyou.39.11_1
- 夏堀 撰 (2003). 障害児の「親の障害受容」研究の批判的検討 社会福祉学, 44(1), 23-33. https://doi.org/10.24469/jssw.44.1_23
- 日本発達障害ネットワーク JDDnet 事業委員会 (2019). ペアレント・トレーニング実践ガイドブック Retrieved January 23, 2024 from <https://www.mhlw.go.jp/content/12200000/000653549.pdf>
- Olsson, M. B., & Hwang, C. P. (2001). Depression in mothers and fathers of children with intellectual disability. *Journal of intellectual disability research*, 45(6), 535-543. <https://doi.org/10.1046/j.1365-2788.2001.00372.x>
- 大西 真美 (2007). 広汎性発達障害の子どもを持つ家族に関する研究の動向と今後の課題 東京大学大学院教育学研究科紀要, 47, 203-210.
- Pelham Jr, W. E., & Lang, A. R. (1999). Can your children drive you to drink?: Stress and parenting in adults interacting with children with ADHD. *Alcohol Research & Health*, 23(4), 292.
- Ringer, N., Wilder, J., Scheja, M., & Gustavsson, A. (2020). Managing children with challenging behaviours. Parents' meaning-making processes in relation to their children' s ADHD diagnosis. *International Journal of Disability, Development and Education*, 67(4), 376-392.

<https://doi.org/10.1080/1034912X.2019.1596228>

- Rivard, M., Terroux, A., Parent-Boursier, C., & Mercier, C. (2014). Determinants of stress in parents of children with autism spectrum disorders. *Journal of autism and developmental disorders*, *44*, 1609-1620. <https://doi.org/10.1007/s10803-013-2028-z>
- Rodrigue, J. R., Morgan, S. B., & Geffken, G. (1990). Families of autistic children: Psychological functioning of mothers. *Journal of clinical child psychology*, *19*(4), 371-379. https://doi.org/10.1207/s15374424jccp1904_9
- 坂口 美幸・別府 哲 (2007). 就学前の自閉症児をもつ母親のストレスの構造 特殊教育学研究, *45*(3), 127-136. <https://doi.org/10.6033/tokkyou.45.127>
- 佐藤 由宇 (2005). 発達障害概念の歴史と展望 田中 千穂子・栗原 はるみ・市川 奈緒子 (編) 発達障害の心理臨床——子どもと家族を支える療育支援と心理臨床的援助—— (pp. 29-53) 有斐閣アルマ
- 澤田 早苗 (2011). 自閉症者のきょうだいの自己認識に関する研究 川崎医療福祉学会誌, *20*(2), 447-451.
- Sharpley, C. F., Bitsika, V., & Efremidis, B. (1997). Influence of gender, parental health, and perceived expertise of assistance upon stress, anxiety, and depression among parents of children with autism. *Journal of Intellectual and Developmental Disability*, *22*(1), 19-28. <https://doi.org/10.1080/13668259700033261>
- 下田 茜 (2006). 高機能自閉症の子をもつ母親の障害受容過程に関する研究 川崎医療福祉学会誌, *15*(2), 321-328.
- Sivberg, B. (2002). Family system and coping behaviors: A comparison between parents of children with autistic spectrum disorders and parents with non-autistic children. *Autism*, *6*(4), 397-409. <https://doi.org/10.1177/1362361302006004006>
- 高堰 仁美 (2022). 発達障害児を持つ親の認知的怒り制御プロセスに関する研究 発達心理学研究, *33*(1), 1-11. <https://doi.org/10.11201/jjdp.33.1>
- 田中 千穂子 (2005). 家族への支援 田中 千穂子・栗原 はるみ・市川 奈緒子 (編) 発達障害の心理臨床——子どもと家族を支える療育支援と心理臨床的援助—— (pp. 239-263) 有斐閣アルマ
- 田辺 正友・田村 浩子 (2006). 高機能自閉症児の親の障害受容過程と家族支援 奈良教育大学紀要, *55* (1), 79-86.
- 通山 久仁子 (2011). 発達障害のある子どもをもつ親をめぐる動向: その論点の整理のために 西南女学院大学紀要, *15*, 55-65.
- 上田 敏 (2020). 特別寄稿「障害の受容」再論—誤解を解き, 将来を考える— *The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine*, *57*(10), 890-897. <https://doi.org/10.2490/jjrmc.57.890>
- 上川 ひなの (2020). 発達障害のある子どもをもつ親が障害を受け入れていく過程に関する文献研究: 受容と認識の観点から 生涯発達心理学研究: 生涯発達研究教育センター紀要, *12*, 25-31.
- 内野 里美 (2006). 障がいのある子どもの両親に対するソーシャル・サポート—夫婦間サポートと

- 養育ストレスに及ぼす影響 — 家族心理学研究, 20(1), 39-52.
https://doi.org/10.57469/jafp.20.1_39
- Wikler, L. (1981). Chronic stresses of families of mentally retarded children. *Family relations*, 281-288.
<https://doi.org/10.2307/584142>
- 山根 隆宏 (2009). 高機能広汎性発達障害児をもつ親の適応に関する文献的検討 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3(1), 29-38.
- 山根 隆宏 (2012). 高機能広汎性発達障害児・者をもつ母親における子どもの障害の意味づけ: 人生への意味づけと障害の捉え方との関連 発達心理学研究, 23(2), 145-157.
<https://doi.org/10.11201/jjdp.23.145>
- 山根 隆宏 (2013). 発達障害児・者をもつ親のストレスサー尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 83(6), 556-565. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.83.556>
- 柳澤 亜希子 (2012). 自閉症スペクトラム障害児・者の家族が抱える問題と支援の方向性 特殊教育学研究, 50(4), 403-411. <https://doi.org/10.6033/tokkyou.50.403>
- Young, R. L., Brewer, N., & Pattison, C. (2003). Parental identification of early behavioural abnormalities in children with autistic disorder. *Autism*, 7(2), 125-143.
<https://doi.org/10.1177/1362361303007002002>
- 湯浅 絢・武井 祐子・岡野 維新・寺崎 正治 (2023). 発達障害児の親の意味づけ過程に関する質的検討—同化と調節の過程に焦点を当てて— 岡山心理学会第 70 回大会発表論文集, 57-58.
https://doi.org/10.34509/opa.70.0_57